

支那金石學概要 石刻

馬 衡 著
塚 本 善 隆 譯 註

第一、刻石と碑の別

第三、經典諸刻と記事諸刻の別

第二、造像と畫像の別

第三 經典諸刻と記事諸刻の別(續)

佛教・道教の石經 支那に於ける佛教經典は後漢の明帝の時、攝摩騰によつて翻譯せられた『四十二章經』に始まると傳へられてゐるが、近人梁啓超はこの説の妄なることを辨じ、支那譯經の第一人は安世高を推すべきであるとなした。^①若し然らば後漢の末に至つて、始めて支那譯佛典が存するに至つたわけである。而して魏・晉以來は譯者踵を接し、隋・唐時代に至つては、佛經蔚然として大に備はることゝなつたのである。

①改造三卷十二號、梁啓超「佛教之初輸入」。譯者は未だ改造誌を見ざれども、梁氏のこの論文は「飲冰室專集」五十二に收む。但しこの問題に就いては、フランスのマスペロ氏(Henri Maspéro)に

Je songe et l'ambassade de l'Empereur Ming (B.E.FEO, X. 1910)
があり、日本にも論著が少くない。此には一々列舉せぬ。

佛經の刻石は、元魏に始まり、高齊に盛となり、金・元以後にこの風漸く熄むに至る。但し清の葉昌熾の『語石』^{卷四}には、(年月の確證のある)刻經の實例は、高齊宇文周の時のものが始であるとなし、また孫星衍・趙之謙二氏の『訪碑錄』^{卷二}の誤を辨正してゐる。然し趙氏の『補寰宇訪碑錄』^{卷二}には、「北魏永安二年^{西紀五二九}史同百餘人造經記」があり、吳式芬の『櫟古錄』^{卷六}には「東魏武定四年^{西紀五四六}金剛經」が見えてゐるのであるから、元魏の時代から既に石刻佛經があつたと認めら

れるのである。

②葉昌熾は孫氏『訪碑錄』卷二に北魏刻とする無年月の『金剛般若經』は、實は宋元の刻なりと正し、趙氏『補訪碑錄』卷二に東魏刻とする山東歷城の無年月『大涅槃經偈』は、齊刻なりとなしてゐる。

佛經石刻の種類は三種に分ち得る。一に曰く摩厓、二に曰く碑、三に曰く幢である。

摩厓刻經は齊・周に盛であつた。山東、河北、山西、



第十一圖(Fig. 11) 河南寶山大住聖窟寺

河南の諸省に最も多い。泰安の泰山、徂徠山、鄒縣の尖山、小鐵山、葛山、岡山(以上山東)、磁縣の鼓山(河北)、遼縣の屋駝嶺(山西)、安陽の寶山(河南)の如きは、何れもその最も著しきものである。字の大なるものは尺餘、小なるものも徑寸、たゞ深山幽谷にあつて拓をとるのに困難である爲に、完全な拓本は入手し難い。

③泰山の中腹石經峪に存す。經は『金剛般若經』にして、九百餘字を現存す。徂徠山の『大般若經』と共に北齊の王子椿の書とせらる。

④徂徠山光化禪寺の東方映佛巖に存し、「般若波羅蜜經主冠軍將軍梁父縣令王子椿」「武平元年(西紀五七〇)」等の銘記があつて、徂徠山の南方にあつた梁父縣の令、王子椿が中心となつて造つたものであることが知られる。

⑤尖山は縣城の東北にあり、一に大佛嶺と云ひ、また大步頂嶺に作る。刻經は『般若經』であり

大沙門僧安興漢大丞相京兆韋賢十九世孫州主簿兼治中鎮軍將軍膠口長史口唯州刺史興祖子深妻徐息欽之休兒等。同刊經佛於昌邑之西繹嶺參山里。于時天降車跡四轍地出踊泉一所故記。大齊武平六年歲乙未六月

の記存し、また「經主口口書晉昌王唐邑妃趙」の文字も存する。北齊堂山にある唐邑の刻經願文に關連せしめて考へらるべきである。(山左金石志、鄒縣志)

⑥小鐵山以下の三山は、縣城の北方或は東北方に存す。小鐵山には北周大象元年の『匡詰刻經頌』あり、葛山、岡山には大象二年の年記が存する。『山左金石志』卷十、『光緒鄒縣續志』卷十參照。

⑦所謂北響堂山にあるもので、北齊・唐邕(北齊書四十)の刻經頌文も存し、彼が「(釋迦)一音の所説を盡く名山に勒せん」と志し、この鼓山石窟之所に於いて、『維摩詰經』・『勝鬘經』・『索經』・『彌勒成佛經』各一部を天統四年(西紀五六八)三月から武平三年(五七二)五月まで四年餘の間に刻したことを記してゐる。詳細は常盤大定・關根貞『支那佛教史蹟三』更に最近の周密な調査報告たる水野清一・長廣敏雄『響堂山石窟』(東方文化學院京都研究所出版)を參照すべし。

⑧『太平寰宇記』に『郡國志』を引いて「遼山縣屋跡燈、高齊之初、鰲山腹、寫一切釋經於此」とあるものに當る。葉昌熾はこの摩崖の巨幅縱横碑文のものを得てゐるが、その字は方徑寸ばかりの筆力險勁なるもの、經は『華嚴經成就品』であると云ふ。(語石卷四)

⑨隋の靈裕(大業元年(西紀六〇五)寂)が開皇中に開鑿せる大住聖窟を中心に『大集經月藏分』・『摩訶摩耶經』・『法華經』・『涅槃經』・『勝鬘經』等の一節を初め、『付法藏傳』の傳法二十四祖名や、また三十五佛、五十三佛等の佛名等を刻す。常盤・關根『支那佛教史蹟』三參照。

經碑は太學石經の例の如く、石を琢いて碑となし、



第十二圖 (Fig 12)
房山雷音洞と
その刻經

行を分ち列を分つて經文を刻してゐる。この類のものでは、房山房山縣に代表的なものを見得る。隋大業中西紀六〇五—六一七僧靜琬が佛教一藏を刻まんと志し、僅かに『大涅槃經』を成就して卒した。その徒導公・儀公・暹公・法公が相繼いでこれをつくり、石室に藏めた。遼の聖宗、興宗、道宗がまた皆錢を賜ひ經碑を續造せしめ、洞中に列置し、入口石扉の樞に鐵を熔し灌いで鋼

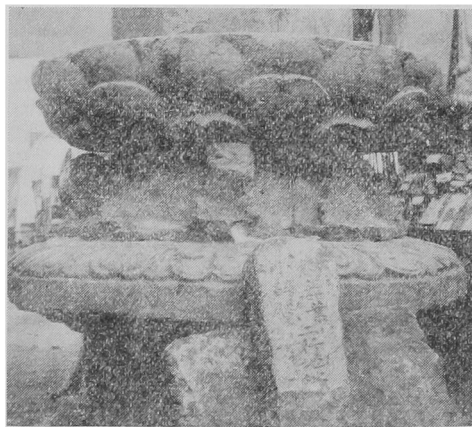
閉してしまつたが、扉を通して洞内に經碑の充滿してゐるのをうかがふことが出来る。今はたゞ雷音の一洞のみが開いてゐて入り得る。通行の拓本は皆この洞のものである。經碑は此外にも山東、河南などにも所々にあるが、殘闕のものが多くて房山の完全なるに及ぶものではない。^⑩



⑩馬氏のこの章の記述は、多く『語石』によつたものである。房山の項も亦然り。その所述に多少の誤も認められる。房山（石經山）の實地調査報告としては、G. Bouillard; She King Shen を推すべく、またその石刻佛經その他の遺物に就いては譯註者等の『房山雲居寺研究』（東方學報京都第五册副刊）に詳密である。

經幢^⑪の制は八面柱（時には六面、或は四面のものも

あり、また十面のものもある）で上に蓋があり、下に座がある。大なるものは一丈に達し、小なるものは徑一尺位からある。多く陀羅尼經を刻んで居り、唐時代を以て最も盛とする。清の葉昌熾は唐以來の拓本を多



第十三圖 (Fig. 13) 河南鄭州開元寺經幢

數に集蒐し、その居を「五百經幢館」と名けてをり、その著『語石』には、經幢を論ずること詳かである。^⑫
 ⑪陝西人は「石柱」と稱し、俗にはまた「八楞碑」と云つてゐる。幢の各面上部に造像があつたりするので「八佛頭」

とも云ふ。唐人は多く寶幢と云ひまた花幢とも記してゐる。遼金時代には多く「頂幢」と云ひ、また多く尊勝陀羅尼を刻してゐるから「尊勝幢子」とも云つてゐる。

⑫『語石』卷四經幢八則。葉昌熾は『語石』にその所藏の經幢六百餘通に達してゐると記して居り、また彼の熱心な蒐集ぶりは、近頃出た彼の『緣督廬日記抄』に就いて見ることが出来る。尙日本に於ける經幢に就いての論述には、松本文三郎「經幢」支那佛教などがある。

以上三種類の刻經の外にも、なほ別の碑刻の陰側に刻してゐるもの、造像に刻してゐるもの、浮圖に刻してゐるもの、楹柱に刻してゐるものなど種類は甚だ多いが、これ等の石は皆刻經の爲に造つたものではなく「附刻之經」と云ふべきものである。

⑬例へば山東省泗水縣泉林にある北齊皇建元年（西紀五六二）の大齊鄉老舉孝義雋脩羅之碑には『維摩經見阿閼佛國品』を刻す。（山左金石志卷十、八瓊室金石補正卷二十一、支那佛教史蹟一等）

⑭武周長安二年（七〇二）の李彌儼造像碑（在山東省金鄉縣寨里廢寺）は、碑面を三層に分ち、上層に佛像を刻し、中層に『般若心經』を刻し、下層に銘文を刻す（山左金石志卷十一）。また唐天寶八載（七四九）の丁思禮造像（在江蘇省沛縣）の陰にも『般若心經』を刻してゐる。

⑮唐神龍年間（七〇五—七〇七）の修行寺尼真空造浮圖銘の陰には『陀羅尼呪』を刻し、王才賓の浮圖頌には、その前に『般若心經』を刻してゐる（語石卷四浮圖一則）。

⑯例へば房山雷音洞の柱には多數の小佛と共に佛名經の佛名を刻してゐる（第十二圖參照）。

凡そこの各種の佛經碑は或は一人一家の所造もあり或は群力を合せてつくれるものもあり、殊に久しい年月を経過してその費用もつゞかなくなつてゐるものもあつて、「法師鑄石班經記」⑰（齊、乾）、「晉昌公唐邕寫經記」⑱（平、武）、匡詰刻經頌⑲（周、大）等に就いてその事情を知ることが出来る。その所刻の本は、或は字句互ひに異るあり、或は譯本不同なるあり、或はまた釋藏未收のものもあるであらう。されば若し徧くこれ等を拓して大藏經本と校勘したならば、その功は敦煌寫經の下にあるものではない。

⑰安陽善應村の洹水北崖に存す。全文「八瓊室金石補正」二十一に收む。北平研究院考古組は、民國二十四年にこの地方の調査をなし、その簡略な報告が同院の『院務彙報』第七卷第四期に出てゐる。拙稿『三階教資料雜記』支那佛教史學一ノ一參看。

⑱註⑦參照。

①⑨ 註⑥ 參照。

道經の刻石は唐の中葉に始まり（景龍二年西紀七〇八のものの）、隋以前にはない。且つ所刻の經數も亦遠く佛經の多きにおよばない。今流傳してゐる所を以て考ふるに、僅かに『黃帝陰符經』『老子道德經』『常清淨經』『消災護命經』『生天得道經』『北方真武經』『九幽拔罪心印妙經』『昇玄經』『日用妙經』『洞玄經』等の數種あるのみである。

『陰符經』には左の二本がある。共に宋刻にして長安にあるものである。

- (一) 乾德四年（西紀九六六）郭忠恕三體書^{②①}
- (二) 乾德六年（西紀九六八）袁正己書^{②①}

『道德經』は左の如く唐刻五、宋刻一、元刻二、計八本がある。

A 唐刻五

- (一) 易縣龍興觀二本
 - 1 景龍二年（西紀七〇八）
 - 2 景福二年（西紀八九三）
- (二) 易縣玄宗御注本 開元二十六年（西紀七三八）
- (三) 邢臺玄宗御注本 開元二十七年

(四) 丹徒焦山本 廣明元年（西紀八八〇）

B 宋刻一、もと高宗御書の二幢があつたが、今は其一を存す。無年月、杭縣にある。

C 元刻二、並びに鑿屋にある。

- (一) 至元二十八年（西紀一二九一）、古文本
- (二) 無年月、說經臺本

『常清淨經』には左の三本がある。

- (一) 後梁貞明二年（西紀九一六）淄川にあり。
- (二) 宋太平興國五年（西紀九八〇）長安にあり。
- (三) 元憲宗七年（西紀一二五七）三原にあり。

『消災護命經』一本、『生天得道經』一本は、並に宋太平興國五年（西紀九八〇）のもので、前記の長安の『常清淨經』と同じ一石にある。

『北方真武經』一本、宋元符二年（西紀一一〇九）登封にあり。
『九幽拔罪心印妙經』一本、宋崇寧元年（西紀一一〇二）耀縣にあり。

『昇玄經』一本、元憲宗七年（西紀一二五七）三原にある。
『日用妙經』一本、元至正十二年（西紀一三五二）鑿屋にある。

『洞玄經』一本、年月闕、長安にある。

この外に『黃庭經』『靈飛經』等、及び趙孟頫所書の一切道經の如き、多く帖本をなしてゐるものは、後人の摸刻に出づるものである。葉昌熾曰く「釋經の精なるものは皆大字にして碑なるもの多し。道經の精なるものは、皆小楷にして帖なるもの多し」と。實にそのとほりである。

②⑩長安碑林に存する唐實際寺主懷惲法師碑の陰に刻す。『金石萃編』卷一百二十四參照。

②⑪佛教の『摩利支天經』の次に刻し、前に黃帝問道廣成子像がある。『金石萃編』卷一百二十四參照。

②⑫唐刻『道德經』の三は易縣の龍興觀に存する。景龍、景福の二本は碑であつて陽に『道經』を陰に『德經』を刻して居り、開元二十六年の御注本は奉勅建の八面の幢に刻せるものである。焦山本は江蘇泰州城壁より發掘せられて定慧寺に移された幢である。何れも貴重な道德經テキストとして老子研究者に注意されてゐるものである。

②⑬陝西省整屋縣の東南三十支里、終南山に樓觀あり。古、尹喜の居りし遺蹟とせられ、唐宋以來、道教の靈地とせられ來つた。此にある說經臺は道德經五千言を説ける所と傳へらる。道教關係の元碑少なからず（石墨鐫華、城南遊記、西安府志等參照）。

醫方 醫方の刻石は、博く施して衆を濟ふの功がある。刻經・造像をなし、以て福を求むるものとは同くないが、然しまたこれによつて功德をなさんとしたものもある。北齊都邑師道興治疾方（武平六年西紀五）

の如きは、造像記と同じく一石に刻んでゐる。^{②④} 七五）橋・鑿井に多く佛像を刻み、普く衆生を度する事業を以て、佛法の慈悲に託せんとしてゐるのと同じ性質のものである。唐の孫思邈は『千金方』を著はし、人命は至重にして千金よりも貴しと云ふ意味から「千金」とその醫方を名けた。然し道興碑は實に孫思邈の書の以前にあつて、已に「千金祕方」の語がある。孫思邈の書名は實は當時の成語から取つたものに外ならぬのである。

耀縣（陝西）に三石（年月及び標題なし）があつて、孫思邈

『千金方』なりと相傳へてゐる。^{②⑤} 道興碑に見ゆるものがあつて、存字闕文皆同じである。何人の所刻であるかを知らぬ。桂林の劉仙巖には宋の呂渭所刊の『養利方』（宣和四年西紀一）がある。また『櫟古錄』は金末に『鍼灸方殘刻』（無年月）を録してゐるが、その地を

記してゐないし、かつ其果して金刻なりや否やも明かでない。此類に似たもので、未だ著録せられてゐぬもの、恐らく少くないであらう。

②④洛陽龍門の藥方洞に存するもの。金石萃編三五（道興造像記）、八瓊

室金石補正二〇等參照。

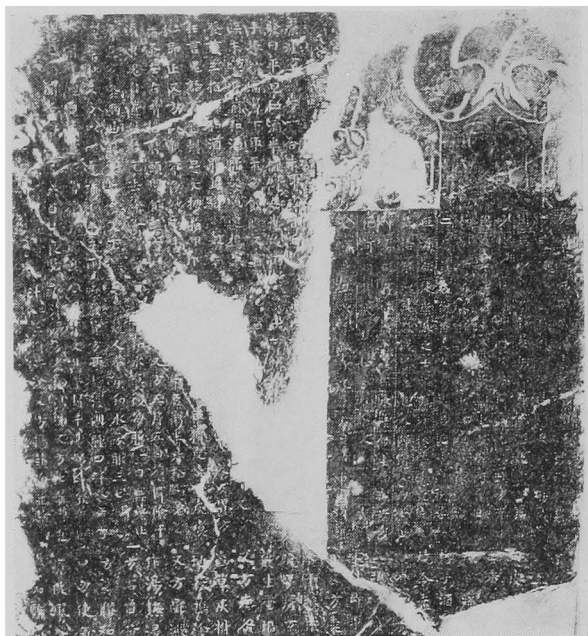
②⑤「金石萃編」の所説に

よつたものであらうが洪頤煊は、明慶隆六年耀州所刻千金寶要石本并びに孫真人千金方刻本をもつて龍門の治疾方に對校するに一も同じき者なし。金石萃編に「存字闕文悉同」と云へる所以がわからぬと述べてゐる（平津讀碑記三）。因みに孫思邈傳は唐書隱逸傳に收む。

耀縣の五臺山は孫思邈隱棲の地として種々の遺蹟が存し、孫真人に關係付けられた碑刻も少くない。金石萃編卷四十九「太宗賜孫真人頌」、「孫思邈禱壽論」の項、また喬世寧

輯「五臺山志」（嘉靖耀州志所收）等參照。

格言 古人の嘉言を録して以て箴戒を昭かにするものを格言と云ふ。上述の經文を節録せる諸刻、即ち唐の



第十四圖 (Fig. 14) 洛陽龍門齊武平六年造像記と藥方

李陽冰（易謙卦）、宋の司馬光（易家人）、張栻（論語問政篇）等の書く所のものゝ如きは、皆の類である（石經の項參照）。この外にも同じ様なものに、宋人書の左の如きものがある。

李宗篆書、韓愈五箴（嘉祐八年（西紀一〇六三）長安にあり。

朱協極書、中庸格言（紹定五年（西紀一二三二）松江にあり。

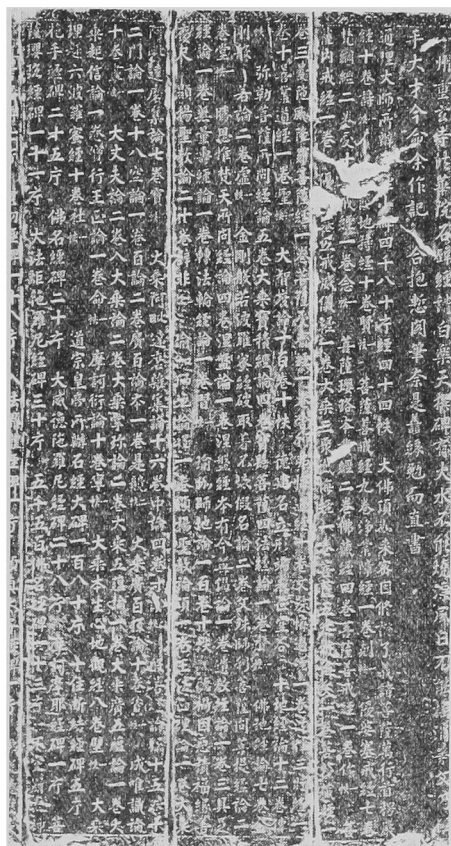
張安國書 漢・疏廣戒子弟語 二本。一は吳縣にあつて淳祐元年（西紀一二四一）、一は當塗にあつて淳祐六年（西紀一二四四）陳壇重刻。

張安國書 唐・盧坦對杜黃裳語 二本。一は衡陽にあつて無年月。一は吳縣にあつて慶元二年（西紀一〇九六）。

また元の陳堅輯『太上感應篇注釋』（至正十二年西紀五二）があるが、これは完全に勸善の書である。

②仇山村の跋を有し、また後には勸善二十六事、懲惡一百七十事を列舉してゐる。その石はもと湖山堂にあり、今は杭州府學に存す。

書目 書目の刻石あるは殆んど宋以後に始まるものと考へる。房山の遼雲居寺續祕藏石經塔記（天慶八年



第十五圖 (Fig. 15) 遼雲居寺續祕藏石經塔記

西紀一〇一八）の如きは、後に毎次の辨經目錄を列し、每十卷を一帙となし、千字文で編號してゐる。藏經目錄の大觀をなすと共に所刻の經の編目をなしてゐるのであつて、たゞ其目を録してゐると云ふだけではないのである。是はかの唐石經の後に十二經の目及び其卷數字數を載せてゐるが如きものである。

専ら書目を刻せるものには、太原の宋太宗書庫記

（宋・大中祥符四年西紀一〇一一）、杭縣の西湖書院重整書目記（元・泰定元年西紀一三二四）、諸城の密州重修廟學碑（元・至

正十年西紀一三五〇）の如きがあり、その目を碑陰に列してゐる。その他、隆平の程珪勸建書樓記（大德八年）、涿縣の涿州儒學藏書記（至正十年）、瓊山の乾寧儒學置書記（至正十一年）の如きも皆藏書のことを記す碑であるが、その陰に書目のありや否やを知らぬ。これは藏書の散佚を防ぎ石に勒して永久に傳へんとするものである。

②拙稿「房山雲居寺と石刻大藏經」第九章參照（東方學報京都第五冊副刊）